〔生化学　第72巻　第4号，p. 253，2000〕

アトモスフィア

老生化学者のざれごと

市原　明
本会名誉会員

編集部から巻頭言で会員に問題提起や啓蒙を依頼されたが，私にはその様な大問題を書く力は無いので，老学者の感想でお許しを願いたい．

私は6年前に徳島大学を退職してから完全に研究は辞めました．理由は研究は世界的でなければならないと思うので，退職後にその様なレベルの研究が出来る自信が無かったからです．しかし現在まで約10年BBRCの審査員をしているので，先端の知識はなんとか保っていると思います．やや門前の小僧習わぬ経を読む様な感じではありますが．

さてこの雑誌の審査に携わって，日本の研究の問題について少し感想を述べてみます．BBRCはインパクト・ファクターもあまり高くない雑誌ですが，日本の研究者の投稿が世界で最も多くて（米国の雑誌であるのに），年間2000編にのぼります．この大部分は，私を含めて4名の日本人審査員に投稿されると考えてよい（BBRCは論文を適当と判断する審査員に直接投稿する）が，私宛が約400編ある（毎日1編以上!!）．これを1編1週間以内に処理せねばならないから，退職後の私の毎日の主要な仕事になっている．

BBRCと類似の国際誌にFEBS Letterが欧州で発行されているが，驚くことにこの雑誌の最多投稿国も日本である（決してドイツや英国ではない!!）．

この理由は両雑誌とも短報，速報であるので，日本人には安直で投稿し易いと思われる．しかしこの小さい国でよく頑張っていると感心すると同時に，どれだけ独創的かという心配もないではない．しかし私の判断では，決して日本の論文のレベルが低いとは思わない．生命科学の分野はまだまだ一発必中の研究は難しく，残念ながら下手な鉄砲も数撃ちゃ当たるという傾向（失礼!!）がないでもないから，日本の大量生産型研究も一概に悪いとは言えないと思う．

しかしそうは言っても，あまりこの様な安直な発表ばかりするのは研究者個人にも勧められないから，是非大部分の論文は出来るだけインパクト・ファクターの高い重厚な雑誌に出して，速報（緊急性）を必要とするときにこれらの速報雑誌を利用される様にお勧めする．

最初に大きなことは言わないと書きながら，結局偉そうなことを書いたかもしれませんが，まあ年寄りのざれごととお許し下さい．年寄りというのはこの様に結構ずるいのです．最後に皆様のご研究の益々のご発展祈っています．